

「3 年生児童はどのような協力ができるのかーゲームや製作活動の中での話し合い支援ー」

(1) プロジェクトの背景と活動の目的

中学年児童は、よく「ギャングエイジ」と呼ばれる。仲間意識が発達し、閉鎖的な小集団(ギャング)を形成して遊んだり、大人の干渉を嫌うといった特徴があるとされる。われわれの班では、市教委の現況報告や協力校校長の談話、学童保育支援員の助言を得ながら、そうした 3 年生との交流を手探りで重ねてきた。

前期では、小学生に馴染みの深いゲームや製作を通して児童の観察に努めることとした。その結果、男女間のコミュニケーションや他者との話し合いに未熟な面があるとわかった。そこで後期には、3 年生児童が他者と協力しやすい活動を考案して、支援のあり方を検討した。対象は、学童保育「風の子クラブ」への通所児童 18 名である(内訳:八幡小 15 名、万年橋小 3 名。うち 1 名が年度途中で転校)。

(2) 活動のあしあと

初回は児童理解に努めるため、3 種類のゲームを用意した。2 回目から 4 回目までは、材料や製作方法のバリエーションを変えながら、学童保育支援員の助言をもとに、手先を使って工夫を重ねるための制作活動を準備した。5 回目は、製作が苦手な児童もいたために、協力して楽しめるようなゲームを 2 種目準備した。

後期の活動(6~10 回)では、かるた遊びとクリスマス会を主なイベントとして、それに向けた準備を行った。お互いに円滑な協力ができるように、製作やゲームの活動中に話し合いの場面を設けた。

具体的な活動の履歴は、以下のとおりである(括弧内は各訪問日を示す)。

- ・1 回目 (5/11) 『体と頭を使ってお互いを知ろう!』……自己紹介やボールを使った簡単なゲーム活動を通して、和やかな雰囲気づくりを目指した。また撮影機材を利用して、児童の把握に努めた。
- ・2 回目 (5/25) 『プラスチックコップでうまく作れるかな?』……プラスチックコップ・粘土・輪ゴムを使って、ゴムの弾力によるおもちゃを製作した。走行距離を測り、グループ内の協力をうながした。
- ・3 回目 (6/15) 『紙スビーを作ろう!』……紙コップをはさみで切り開き、「フリスビー」上のおもちゃを製作した。模造紙やフープで的を作り、全員で楽しめるようにした。
- ・4 回目 (6/29) 『自分の力でどこまでできるかな? ~段ボールぽっくりを作ろう~』……段ボール紙を丸めて、「缶ぽっくり」を模した遊具を作った。工程内で、電動ドリルによる穴あけに挑戦した。
- ・5 回目 (7/13) 『チームで協力しよう! ~風船リレーと風船バレー~』……チームに分かれて、風船を使ったミニゲーム(うちわで扇ぐバレー、二人一組で背中に挟んでのリレー)を行った。
- ・6 回目 (10/19) 『巨大スリーヒントカルタで遊ぼう ①製作と準備』……八つ切り画用紙に描画、着色して、カルタを製作した。各自で 3 つのヒントを考案して、クイズ形式の読み札を作った。
- ・7 回目 (11/9) 『巨大スリーヒントカルタで遊ぼう ②遊び方の協力と工夫』……前回製作のカルタを使い、2 人 1 組で動くなど、チームで協力して遊べるような独自ルールを考案した。
- ・8 回目 (11/30) 『クリスマス会の飾りを作ろう』……個々の関心を生かしながら、身近な素材(毛糸や空き容器、まつぽっくり等)を利用して、クリスマス会向けの装飾を製作した。
- ・9 回目 (12/7) 『身近な素材で協力してクリスマスツリーづくり』……前回よりも材料を増やして、3 グルー

プに分かれ、班内で相談・協力をしながらクリスマスツリーを製作できる環境を用意した。

- ・10回目(12/21)『クリスマス会をしよう!』……3チームに分かれて、裏表異なる色の画用紙を同一に揃える「ひっくり返しゲーム」と、ペットボトルをピンに見立てたボーリングを行った。

(3) 活動プロセスでの意図と成果の概略

前期の5回の活動では、児童が親しみやすいボールや風船を使ったゲームと、紙皿、段ボール箱などを用いた製作活動とを通して、3年生児童の様子を観察した。その結果、手先の器用、不器用の個人差が大きいこと、男女間の円滑なコミュニケーション、他者との話し合い場面にまだ未熟な面があることが分かった。

後期の5回の活動では、前期に観察された児童の様子から、他者との「協力」を促す支援の在り方を検討した。このため、各活動に次の2点を意図的に導入した。1点目は、制作活動とゲームの中に、相談の機会を毎時間設定することである。前期の偶発的な児童のやりとりをふまえて、例えば相談時間や「作戦タイム」等を設けるものである。2点目は、各回にグループ活動を入れ、さらにメンバー構成に細心の注意を払うことである。つまり、前期に観察された児童の人間関係と男女の組み合わせに留意したグループを編成することである。具体的な活動は、手造りの「スリーヒントカルタ」製作と遊び、最終回「クリスマス会」にむけた準備製作と本番でのゲーム活動などであった。

私たちがプロジェクト活動を通じて得られた気づきは、およそ以下の通りである。

- ・前期の活動で目立った、男女間のコミュニケーションが円滑でない、他の児童の話しを最後まで聞けない、活動中によく喧嘩が起こるといった状況は、後期では幾分緩和された。



1回目:ボールを使ってゲームで交流を図る



3回目:紙コップを使ってフリスビー作り



7回目:身近な素材でクリスマス会向けの製作



10回目:3チーム対抗でひっくり返しゲーム

- ・相談タイムを活用せずに、製作にとりかかる、材料を使って活動と無関係に遊ぶ、後に使用予定の道具で先に遊ぶなどの問題行動も見られ、より児童の実態に即した支援の手立ての必要性を認識できた。
- ・今回われわれが「準備」として行っていたのは、専ら材料の収集であったが、児童たちが遊びながら学ぶ環境を作るには、具体的な場面をイメージして試行を重ねる必要があることも、グループ内で了解できた。

(4) 活動の総括と今後の課題

通年の活動を通じてわれわれの班が獲得できた「3年生像」は、平たく言えば、非常に活発で、集中力が続かず、自己中心的な言動を取ることがしばしばあるということである。今後の教育実習等での実践活動で、今回の経験を存分に活かしたい。今後の課題としては、次のような点が挙げられる。

- ・例えば、後期の2回目の巨大カルタゲームの実施前の学生間でのリハーサルができなかったために、実施のときに円滑な進行ができなかった。このように、活動全体を通して、製作活動に使う材料の事前確認、ゲームのリハーサルなどが不足していた。
- ・小学校への訪問までに、原則として1週間の振り返りと活動準備の期間があった。基本的に学生間で分担して行ったが、作業進度を適切に共有できないことがままたり、当日に余裕を持って臨めなかった。
- ・活動終了後、活動の振り返りに時間をかけ過ぎたため、次回の活動を考案する時間を十分に取れなかった回があった。
- ・自由課題ではなく、例えば、身近な素材から切り絵や貼り絵で文房具や日用品を表現する、影絵から想像するゲームなど、取り組みやすい活動の文脈づくりが大事だと考えられる。
- ・ほぼ全ての児童が製作自体への関心は強く持っており、目的的な工作はできそうである。例えばメンバーで分担した部品を組み合わせて、大きな工作物が完成するなどのテーマを作れば、班での協同性を支援できる可能性も広がるのではないか。
- ・特に前期の活動において、材料調達などについて指導教員に頼り過ぎたことがあった。

これらをまとめてみると、事前の準備(フィードバック、活動計画、情報共有など)、当日の児童との関わり方、児童の実態といった点に留意しながら、より一層自分たちの実践的知識を増やす必要が示唆された。

(5) 地域からの評価

2016年7月に実施の中間報告会では、「3年生児童は、発達段階からみて接し方に工夫が必要」などの励ましの声や、我々の掲げた「協力」という課題が、そもそも3年生児童の発達課題であるから難しいといった指摘を、他専攻教員や学生から受けた。2017年1月の成果発表会では、3年生の発達実態をより丁寧にふまえた課題設定が必要なことや、3年生児童の実態がよくわかったといったコメントが地域の参観者から寄せられた。これらの指摘も、メンバー間の振り返りにとって大きな示唆を得ることができた。末尾ながら、活動に際して協力いただいた関係諸氏に、深く感謝申し上げたい。

(6) メンバー一覧

北海道教育大学函館校 国際地域学科 地域教育専攻2年生

5412 小木田美咲 5414 清水野朱 5416 志田愛絵 5417 岩崎大地 5418 長谷川沙緒

5419 五十嵐柚季 5421 澤田祐輝 (指導教員:山口好和 橋本忠和)